

神陵文庫

紅萌抄

の刊行について

「紅萌クラブ」は多年にわたって三高会館東京分館として同窓会員の親睦および學術研究に対する便宜供与の場として利用されておりましたが、故鈴木常夫氏（S・17・9文丙）創始の同クラブ所有者（株）「紅萌」の事情により平成2年7月末を以って閉鎖の止むなきにいたりました。

三高会館東京分館における諸会合でのレクチュア内容を収録した『紅萌抄』なる冊子は（財）三高自昭会が各年度予算に計上する分館事業費の大半を充当して東京分館サイドで刊行し広く会員に配付してまいりましたが、以後『紅萌抄』に神陵文庫の文字を冠して、本館においてその刊行をつづけることにいたします。

なお、関東支部会員の諸例会はその後とところを変えて引き続き開催されていますので、『^{神陵文庫}紅萌抄』は、三高会館で回を重ねている「会館のつどい」でのレクチュアと「公開講演会」での講演の内容を収録する『^{神陵文庫}』ともども順次刊行を続けていくこととなります。

(既刊) 第一卷 (その六)

(平成元年3月〜平成元年11月)

目次

| | |
|-----------------|-------|
| 高齢化社会と医療機器 | 上野 昭二 |
| 翻訳のたのしみ | 市原 公祐 |
| 日本海運について | 岡井 安正 |
| ヨーロッパと日本 | 伊谷 峻一 |
| 「科学・技術・製造」と「ひと」 | 和田 努 |
| アンチダンピング提訴について | 佐古田正昭 |
| 焼き物の楽しみ | 伊東 正典 |
| わが交友抄 | 三好 基之 |
| 日本の農業あれこれ | 森田 勇吉 |
| 建設技術と最近の研究動向 | 大崎 順彦 |
| 天文・宇宙あれこれ | 高瀬文志郎 |

(既刊) 第二卷 (その七)

(平成2年2月〜平成2年12月)

目次

| | |
|----------------|-------|
| パズルとコンピューター | 澤田新一郎 |
| 下水道の話 | 吉田 公二 |
| 自由の学風を憶う | 松延 慶二 |
| 議員立法 | 上田 章 |
| 日米経済摩擦について | 小穴 雄康 |
| 上田三四二先輩と『新潮45』 | 亀井 竜夫 |
| 5年間のバンコック | 錦織 俊郎 |
| 新幹線の建設計画について | 富井 義郎 |
| 国際企業の企業戦略 | 八城 政基 |
| いま、石達が語りはじめた | 細野 礦史 |
| 三島由紀夫事件 | 徳岡 孝夫 |

(既刊) 第三卷 (その八)

(平成3年1月〜平成3年12月)

目次

| | |
|--------------|------------|
| 海外体験いろいろ | G・M・A・グテレス |
| 気象いろいろ | 清水 正義 |
| 日本語の文法について | 高橋 太郎 |
| 半導体の最新事情 | 日野 晴夫 |
| 土地問題の核心 | 國宗 正義 |
| ドイツ司法調査旅行 | 環 直弥 |
| その頃の思い出 | 西田 美穂 |
| ——配属将校殴打事件—— | |
| わが青春移動大学 | 川喜田二郎 |
| くすりの周辺 | 茅壁 敬祐 |

(既刊) 第四卷 (その九)

(平成4年1月〜平成4年6月)

目次

| | |
|------------------------|-------|
| 素粒子の世界 | 安見真次郎 |
| 混乱の現代 | 長坂 強 |
| 体験的研究論 | 伴 義雄 |
| 将来の電波の世界 | 高木 盛久 |
| 朽ち果てぬ鉄に魅せられて | 井垣 謙三 |
| 石油コンビナート等の 安全問題について | 鶴戸口英善 |
| 建設業の国際化と対米建設摩擦 | 金元 功 |
| 私の三高時代 | 藤林 益三 |
| アンダマン島における 戦犯問題について | 寺前 章 |
| JRになって五年 | 武藤 良介 |

(既刊) 第五卷 (その十)

(平成4年7月〜平成6年3月)

| | |
|----------------|-------|
| ヨーロッパから見た日本 | 品川 正治 |
| 徐福伝説 ニギハヤヒは徐福か | 工藤 憲男 |
| ロンドンの思い出 | 柴田 善助 |
| 出たとこ勝負 | 森 毅 |
| 皇太子の結婚について | 村尾 清一 |
| 医療制度の現状と将来 | 日野原重明 |
| 私のバリ―サ・エ・ラー | 鈴木 忠敏 |
| 「和魂洋才」とその行方 | 藤沢 令夫 |
| しろうとの木版画 | 河原 勇 |
| 原子力の光と影 | 川上 幸一 |
| 規格の話 | 三佐尾武雄 |

(既刊) 第六卷 (その十一)

(平成6年4月〜平成7年6月)

| | |
|-----------------|-------|
| 物を書くということ | 古山高麗雄 |
| ロシアから帰って | 枝村 純郎 |
| 鉄道信号の話 | 片岡 軌夫 |
| 我が故郷北朝鮮の現況に思う | 山中 重男 |
| 日本の水 | 川本 正知 |
| 21世紀のエネルギー問題 | 鈴木 篁 |
| エネルギー産業と地球環境問題 | 小林 料 |
| イギリスから見た欧州状況と日本 | 北村 汎 |
| 寮歌管見 | 梅田 義孝 |
| 阪神大震災 | 玉野 俊郎 |
| ドイツから見た欧州情勢 | 村田 良平 |
| 特捜検察のはなし | 藤永 幸治 |
| 技術士のしごと | 武田 進 |
| 北朝鮮に旅して | 大川 美雄 |

(既刊) 第七卷 (合本Iに収録)

(平成7年10月～平成9年5月)

| | |
|------------------|-------|
| 現下の金融問題 | 中村 金夫 |
| マルチメディアによせて | 坪井 達夫 |
| 特許と国際化 | 平林 謙三 |
| 英仏海峡トンネルと欧州の鉄道事情 | 持田 豊 |
| 身辺事情と現代の世相について | 西田亀久夫 |
| 写真映像の世界 | 上田 博造 |
| 沖繩をみつめる | 植木 光教 |
| 寮歌について | 雑喉 潤 |
| 医療をめぐる諸問題 | 高橋 勝三 |
| 京大天皇事件(学生時代のこと) | 倉野 昌夫 |

(既刊) 第八卷 (合本IIに収録)

(平成10年11月～平成11年10月)

| | |
|-------------------|-------|
| 通へる夢は崑崙の高嶺の此方ゴビの原 | 岸田 達也 |
| 通産省こぼれ話 | 加嶋耕之助 |
| 本格化した第三次産業革命の進行 | 岸田純之助 |
| 成人病の予兆 | 山根 至二 |
| 質問書方式による講義 | 田中 一 |
| これからの高齢者医療について | 横田 英夫 |
| 冷戦の終結と米欧の軍縮 | 竹岡 勝美 |
| 源氏物語のよみ方 I | 秋山 虔 |
| 源氏物語のよみ方 II | 秋山 虔 |
| 生命倫理と二一世紀の科学 | 井村 裕夫 |

(既刊) 第九卷 (合本山に収録)

(平成11年6月〜平成13年5月)

- | | |
|-------------------|-------|
| 「京都学派の哲学」再考 | 古田 光 |
| 外交を読むーガイドライン・日中関係 | 中江 要介 |
| 与えられた寿命と勝ち取る寿命 | 日野原重明 |
| セザンヌ | 内田 園生 |
| 国鉄ビッグプロジェクトよもやま話 | 富井 義郎 |
| ビルマでの戦い | 古山高麗雄 |
| 神戸震災五年を経て | 牧 冬彦 |
| 帝国解体後のロシア | 枝村 純郎 |

(既刊) 第十卷 (合本IVに収録)

(平成12年6月〜平成13年12月)

- | | |
|------------------|-------|
| パリ生活五〇年・画家の生活と意見 | 田淵 安一 |
| 日本の大学『冬の時代』について | 富塚文太郎 |
| 英国と日本の狭間で | 大川 美雄 |
| マザーグースの歌 | 来住 正三 |
| 海軍・京都学派・世界史 | 岸田 達也 |
| 一九四五年夏、ポツダム | 仲 晃 |
| グリーンランドの話 | 高田 良一 |

(既刊) 第十一卷 (合本Vに収録)

(平成14年2月～平成15年6月)

| | |
|-------------------|-------|
| 和辻哲郎と津田左右吉 | 市倉 宏祐 |
| アナトール・フランスとフィレンツェ | 杉田 欣一 |
| 二十一世紀の環境問題 | 近藤 次郎 |
| ラオスと電気通信 | 岩噌 弘三 |
| 寮歌の時代 I | 岸田 達也 |
| 寮歌の時代 II | 岸田 達也 |
| 私の三高体験 | 青山 光二 |

(既刊) 第十二卷 (合本VIに収録)

(平成12年11月～平成16年4月)

| | |
|-------------------|-------|
| ランドスケープの歴史文化と町づくり | 近藤 公夫 |
| 新聞という印刷物の話 | 梶 光雄 |
| 時代を顧みて | 矢口 洪一 |
| 湯川秀樹と朝永振一郎 | 中村誠太郎 |
| マクナマラの老春紀行 | 仲 晃 |

(既刊) 第十三卷 (合本VIIに収録)

(平成13年7月〜平成17年9月)

『親孝行と愛国心』

岡本 道雄

古典をどう読むか

秋山 虔

憲法九条と財界と私

品川 正治

国際物流「海」と「空」

中村 啓三

同時代史としての昭和の戦争

尾藤 正英

日本の実用衛星用ロケットについて

西本喜久雄

最後の沖縄県知事島田叡

田澤 仁

(既刊) 第十四卷 (合本VIIIに収録)

(平成18年8月)

外国人に日本語を教える

山本 英二